あま
鞍馬天狗
定家
蝉丸
猩々

十二

海士

次第 出るぞ名残三日月の都の西
に急がん ワキサシ 天地のひらけし恵
久しき天のこやねの御譲 大臣 房前
の大臣とは我事なり扨もみつからか
母は讃州志度の浦房前と申所
にて空しく成給ひぬと承りて候へ

ふさゝきは以前よりぞ追善をもなさば
やと思ひ候 あらぬ旅にならさりや
うつりみかれ山かくは雲のみゐすかたの
恨めしさ 三笠山をしてはちらん
沖きしれく南の海よりつゞくと
ゆきは程なく津の国のこや日本の
うめあらは淡路のわたりもほとちかく

あまの浦に着するハと思ひ定めぬ
おもひをとくらく 御急候程にこれハ
はや讃州志どの浦に着きて候
よあまきをもされハ男女老若多くられ候(?)
と一人あまりば此里を御訪候て此
所の謂をも委く尋あらまほしくて候
海士がかるもにすむ虫よわれからね(?)

我からぬらす袂かな　サシ 是は讃州志
どの浦寺ちかき所なれば心あるさまの海
の宮乃海人よそれハいやうなよわか
伊勢をのあまハ中よあるれどらと乃
山の月もさまら濱荻の風よ秋を志る
すまも海の海士人ハ塩木よもすまれ
桜をおりて春を忘れぬたより

きとあるよ此浦よそハあるさまも名の
みある海の底よそて花をちく草も
あし何をみるめかよそても
こゝろある海川のしづ塩海かきそ流き
あれ世をわたるたつきされハ心なし
ともにひかきのあ海乃はかなきの人
ら海く　かやうに是ハ所ゐだそとハ此

浦の海士にてさふらふか　さんさうらふこの
ふさゞきの海士にて候　海士ならば
あの水底のみるめを刈てまいらせよ
痛はしや旅つかれ何よりのそまゝせ奉る
かや我も母を里とやすらふが猶いやしき
田舎に住みてよそきゝや雲の上人と
みるめなれぬがる迄もあし沈みるめを

召れ上　いや〳〵左様の為にてあり
何れ水底の月を御覧せんよみるめ
茂りて障とあれは刈のけよとの
御諚あり　扨は月のためにかりけれ
きよとの御諚や昔もかゝるためし
ありし明珠を此沖にて龍宮
にとられしをとりあげしも沈られ

上哥
あ海三つ月も三ち塩のくみとめを
いかやかによよ　瑠行と明珠をうつさ
あきしも洲浦の海士とかや
けん洲浦の海士にてはまへあま成
里をいお海の宮と申てかの海人
の住居ひし在所にてはる見なる
嶋は珠をとりあき始てみそめし
ようつく新しきたま嶋と書て新
珠嶋とやらん　扨其玉の名をば何と
申きるぞ　玉中に釋迦乃像まし
ますがいつたよりおかみ奉れども同し面
なるによつて面てをむすよそれ
うひとかつく面向不背の珠とやらん
かの寶をもとそ漢朝よりも

わかりきるう

シテ「今の大臣淡海公の
御妹は唐土高宗皇帝の后に
立ち給ふされば其御氏寺なれば
とて興福寺へ三つの宝を渡さ
るる花原磬泗濱石面向不背の
玉二つの宝は京着し明珠は此
沖にて龍宮へとられしを大臣身を

やつし此浦に下り給ひ賤しき海士
乙女と契りをこめ一人の御子を
儲く今の房前の大臣是なり

大臣「扨は是までききつる大臣よあら
あつしの海人や扨はかかりき

シテ「あら何ともなや今迄は余所の事とこそ
思ひつるに扨は此浦の者にて候ひける

かやうに候ふ者は房前の大臣

我は子と生れながらこひしき藤門

ざれば心よりつるまハ此うみのつらき母

古へあの財房をかうりていはく

それくも其母ハ讃州志どの浦房前

のあまりやきを弱き有とてとかれ

をのこひげりていやしき海士乃子

志度乃めのそこよやとりきるそや

上歌 よしそれとてもつきさるうべしたり

宿るも月の光雨露の恩よあらし

やせ衰へ身はまりうり簑きつゝみれ

あま人や御あらうを流し泪へ

シテ上 安心あきたの哀ちりてもぬらし

我袖をとがきつくしほまきとやそれなお

乃はなれやかゝる貴人の御中に海士
の胎内に宿り給ふも一世ならぬ契りぞと
思ひ有月の漂ようつりて光陰を
まひてとくありぞれども年ある里れ
ぞ縁としてやほんまことしもちぞう
や我君乃ゆかりよ成たり紫の藤咲
門の口を閉てべきやと水鳥乃帝立

に、
成ぬをかくるひまし申述乃るよ
洪むをとうづきあきし前をば前ぞて
かしまあみてはめよ給へはらい
そと海あみてはめさかいきゝへし悲母
あ海人やうぞし洪むをとうせかぎら
ばしは子を代つぎの御位よあし給へ
かやしうべ子細あらしと領帯し

終よ母ハ我子ゆへよすてん命つゆ
程も惜からしと千尋乃縄をこし
につけ若此玉をとりえたらハ此
なわをうこかすへし其時人々ち
からをそへひきあけ給へと約束し
ひとつの利けんを抜もつて彼海底よ
とひいれハ空ハひとつよ雲の浪煙の浪
をしのきて海まん／＼とわけいり
て直下と見れとも底もなくほとりも
しらぬ海底よそも神変ハいさしら
す取えん事ハ不定なりかくて竜
宮よいたりて宮中を見れハその高
さ三十丈乃玉塔よかの玉をこめ
をき香花をそなへ守護神ハ八

龍神居り其外悪魚鰐の口のがれ
がたしや我命をも恩愛の古
郷のかたぞ恋しきあの波のあ
なたに我子はあるらん父大臣もを
はすらんさるにても此まゝにわかれ
果なん悲しさよと涙ぐみて立しが
又思ひきりて手を合南無や

志渡寺の観音薩埵の力をあはせ
てたび給へとて大悲の利剣を額に
あて龍宮の中にとび入ば左右へ
ばつとぞのいたりける其隙に宝
珠をぬすみとつてにげんとすれば守
護神をつかくかねてたくみし事なれ
ば持たる剣を取なをし乳の

しるしをかききり玉を押こめ剣を捨て
ぞふしたりける龍宮のならひに死
人をいめはあたりにちかつく悪龍
なし約束の縄をうごかせは人々悦
ひあけゝり玉はしらす海士人は
海上にうかひ出たり　かくて
うかひ出たれとも悪龍のわさとみえて

て五体もつゞかすあけになりたり玉
もいつゝみありけめしもむなしく
かきろよとて大臣あけさせ給ひて其とき
息のしたより申やう我乳のあたりを
御覧せよとありしかば剣のあたりたる
跡ありて其あたりより光明かくやく
たる玉をとり出しぬ扨こそ御子も

約束のごとく此浦のなみよせて房前
の大臣とハやせじとハ行ゑもつくしき
見る子はそれ母なる人の幽霊よ
此筆のあとを御覧してふしんを
なさて弔らへや今ハかへらんあだ浪
のよるの海に入りて夢人のなごりきく
あやしきうら嶋が松や子の契り

あさ志ほ浪のうきよ志つミきり
立浪の志らまよきりいろよりも
あまりよみのきぬかはまて仏道よ
ば手跡をみるひとゝ魂をさそふ
をぬかて人　「母ハ亡母の手跡と
ひらきて見れバ魂江よミさらて一千
三年骸を白沙ようつむく日月の

法華をよみ冥路あんくたり我をと
ふらふ人あり慈孝行たらはらゞ冥
閻とたちまよ聖されより八十三年
法くたらよか所ありしいざとふろ
此寺のでころ法りある手向くさ
花の蓮妙經そのの善をあり
法よく声やくまく無人聲

慈の經乃はよふひやあり此法經よ
ひらわて五障乃導多は天王記莂を
蒙り八歳乃龍女ハ南方無垢世界
よ志やうちうらあむとく稱讃し
法よくし深達罪福相遍照於十方
微妙淨法身具相三十二以八十種好
用荘嚴法身天人所戴仰龍神

感恭敬ありけれハ此洲經や那
今此經の徳用よつて天龍八部
人與非人皆遙見彼龍女成仏拇る
讃州志度寺といふハ毎年八講
朔望の勧め仏法繁昌の霊地と
成しこの孝養とうきかれ

鞍馬天狗

加様に候者ハ鞍馬の奥僧正か谷に
住居する客僧にて候扨も當山に
をひて花見の由承候間立越そそ
なる梢をも詠ばやと存候
鞍馬の御寺に住申者にて候扨も
當山においひて毎年花見の所に

殊に當年ハ一段と見事にて候間
東谷へ此よしを持て参れといはれ候
御申西谷より使をよこして候
よ文の御座候御覧候へ　何と西谷よりの
花今を盛と見えて候に　など音信も
なかりける一筆啓上まゐらせ候に
いそぎ見に行かうずるにて候　花盛

咲も残らず散もはじめぬ面白き事
古歌の心音信なくとても木陰に
詫候へきに　花咲かば告げんといひし
山里の使は来り馬に鞍　鞍馬の
山のうづ桜手折枝折をしるべにて
奥も迷はじ咲つづく木陰になみゐて
いざいざ花をながめん　同めづらしや

あまりに客僧の渡り候是ハ比狼藉
なる者にて候をつ立うするにて候
ワキ何申 暫らくいかに此は御存知のことく源平両家
の童形達各ハ都よりも桜の花に
思ふへからんか是又か様に申さんは
人をえらひよに似てハ同し花をハ明日
こそ御入候へきれ共先此所をハ御立

あらかたくなや候 いや/\それハ僻説
かく是程の客僧をおつ立申すあら
シテ上 遥に
ワキ いや此方立あふまてもなし
人家をみて花あれは則入論せす貴
賤と親疎とをわきまへぬを法春の習
ひとり関あるも学世によまさるい鞍馬寺本
尊ハ大悲多門天慈悲にもれたらんに

うれしや花の本、半日の客月
の前の一夜の友、それさへよしみはある
物をあら痛はしや、近うよつて花御覧候へ
思ひよらずや松虫の、音にだにたてぬ
深山桜をば訪ひの稚児よ、此山に
あるとも知らぬ雲の立まじりつゝね
知る人なし、誰をかも知る人にせん

高砂の松も昔の友かくの
折ものわらはの袖まくや言の葉しげ
き恋草の露の思ひを御覧てうかきほまれ梅
梅こそ花の情なれ花よ三千年の約束
人よなうて咲くともあれ初くないのあらん
うらつきは心そよあらましの花
まはりて花のまゝ浮かれくやしけりよ

シテ下歌 めづらしやいざさらの児達をみなく
御帰りは行ぞそれば一人見よなからそ
地下歌 けふの児達ハ平家の一門
中にも安藝守清盛が子たるにより
一寺の賞翫他山のおぼえ時の花
みづからも同山にハあれどもよろづ面
目もなきことども月にも花にも捨
られ候 シテ下歌 あら痛はしや流石また上﨟
ときは腹にハ三男毘沙門の沙の字
をかたどり御名をも沙那王殿とつき
申すあら痛はしや御身をしれば所も
鞍馬の木陰の月　見る人もなき山
里の桜花よその散なん後にこそ
咲べきによあら痛はしのゆくゑや

松嵐花の跡とひて雪と降雨
やあはる猿雲にさけんでハ腸を
たつとかや心すこれ気色や夕を告る遠
寺あはらゞ鐘声すみしてよそに遠き奥
鞍馬の山道の花ぞしるべする此方へ
入らせ給へやさても此程お供して見せ
申つるところのある時ハあたご高雄の

初桜ひらや横川の遅桜よしのはつ
せの名所を見残す方もあらばこそ
去みくもめぐみ人よまし御身をハ我と
慰め給はんは名をあのりたまひませ
今ハ何をかつゝむべき我此山に年経
たる大天狗ハ我也君兵法の大事を
伝へて平家をほろぼし給ふべきなり

けにも思へハ明日し手大書やへしけり
なといひて客僧ハ大僧正か谷をさして
雲を踏くとんてゆくら雲をしのん
てとんてゆく　抑も沙那王か出立ハ
はたにハうす花桜のひとへに顕紋
紗の直垂の露を結んて肩にかけ白
糸の腹巻白柄の長刀　喩へハ天魔

鬼神なりとさこそ嵐の山桜はなや
かなりける出立かな　抑是ハ鞍馬
の奥僧正か谷に年経て住める大天
狗なり　先御供の天狗ハ誰々そ
つくしにハ　彦山の豊前坊
四州にハ白峯の相模坊大山の伯耆坊
いつなの三郎富士太郎大嶺の善鬼か

一たうかつらきたかまよそ迄も有まじ

へんどにおいては比良横川如意

が嶽我慢高慢の峯まもんて人への

為にハあたご山霞とたなびきくもと

なつて月ハ鞍馬の僧正か谷に

みちみち峯を動かし嵐こがらし滝の

音天狗だをしはおびたゞしや　めづよ

汝ほうへんなぞとて小天狗をもまいらせてはよ

稽古のきはをもあんほうにさとらそ

牛若 詞　はんしよ又小天狗たまうひ狐は

されども切付稽古のきはでさせや度々

にひつきまれ師匠のやうなれ申さんと

思へどもまうさんば　是ハよその人や

詞　ぜ様ハ師匠の尊にて思ひ付く

されば此乃んかくてつくゆめさきへし母も
漢乃高祖乃臣下張良と云者黄石公と云
に此一大事を相伝すべかりけるにまく
行あひたまひしに行とかたらふ時左
の履を落しけるに張良その履をとく
とりてよとしみけるに又黒でしかれ履を
とらくそのんで又を度以前乃ごとく馬

よくく行あひたまひしに又なびかひとり
右の沓をおとしやたりけり　張良あの
沓をとりてかきよとしみ拾ひてすゝむる
しかるをもよろしく此一大事を相伝する
上
馬上より落つる履をとつてかく
張良沓を捧げつゝ馬上にあれば
黄石公よろこびてきめられし時兵法の

奥義を伝へ名家 其ことくよつて上
嵩もくちも花底にあつる御方様れ
みな姿も心もあり天狗や師匠や
坊主とは賞翫へいうも大ゆせのこ
さん伝へて平家を討んと思ひりや
やけりの心さやあ 抑其器れはほ
まれの清く源平藤橘四家にも

取分け源家のみかよし清和天皇の
孫にしてあらく時節をかんかへあるよ
たかはる平家を西海にたつ平浪
滄波の浮雲に飛行の自在を受て
かきをたらき會稽をすすき
御身を守らへし是迄あり也御暇
申て立帰ゝはへし若君にとかりるへ

其ほか一門の西海四海の合戦といひ
いはんや歌舞をも離れ弓矢の力をたのみ
守れ〳〵と頼めやたのめと拝みかき
くらさ頼めやたのめと夕陽の雲に暮るる
のぼるもまがふよかきくらさくなりにけり

定家

次第 山より出る北時雨〳〵行衛や
さだめなかるらん
是ハ北国方より
出たる僧にて候我未都を見ず候
此度思ひ立都にのぼり候
冬立や旅の衣のあさまだき〳〵雲も
ゆきかふ遠近の山又山を越えて

紅葉に結ぶ縁の道花の都に都に着
きにけり　急ぐ程に是ははや都
千本の辺りにて候　暫く此
所にやすらはやと思ひ候　面白や
比は神無月十日あまりの梢も冬
枯れて枝に残れる紅葉の色までも
所々の様迄も都の気色ことなれ
ほの様ことある夕べかなあら笑止や俄
に時雨の降り来りて候ぞ是によき有
げなる宿りの候　立寄り時雨をはらさ
ばやと思ひ候　シテ詞　なふ〳〵御僧何しにそ
の宿りへは立寄給ひ候ぞ　ワキ　唯今
の時雨をも晴さん為に立寄りて候
女　されは時雨の亭とてよしある所也

其心をもしろしめして立寄給ふか
とおもへハかやうに申也 ワキ「げに〳〵是成
額を見れハ時雨の亭とかゝれたり折
柄面白ふ社候へ是ハいかなる人のたて
置れたる所にて候ぞ 女「是ハ藤原の
定家卿のたて置給ふ所なり都
のうちとハ申ながら心すごく時雨物
哀なれハとて此亭をたてをき時
雨の比の年〳〵ハ爰にて哥をも詠し
給ひしと也古跡といひ折柄といひ其心
をもしろしめして逆縁の法をも
説給ひて彼菩提をも弔ひ給へ
とすゝめ申さん為に是まで
きたりたり
ワキ「扨ハ此亭の定家

郷のたゞ直衣つる前かや借し時雨
をとゞむる宿なれば爰ハいつまでのことゝ乃紫
やさし 女「いや何まゐらせうあなたこそ時雨の比
乃舞とおもハゞそれとハやかゝし
去ながら時雨時をとまると云心をいつ
ーー、、、ーーーー
まりれなき無あるまり柿の月ざうつま
まより時雨知らん此こゝとがきこゝの

くの家まてとかくれたまへども此方
をもやとへき 詞きのよく気ある字の歩かつ
げにも時雨やいつまでれなきざ無まで縁
跡おもう 女「人ハあるあるまじとど語れ
かともし假乃世まで 詞他生の縁ハ柯もまね
思う上樹の陰の宿り 女一河の流を
をぬてたま 詞心もとまれと 折からに

今ふるも宿ハ昔乃時雨にてうつく
心すみにし其人の哀をしるも夢乃
世のげにさだめなや定家の軒端の
夕時雨ふるきにかへる涙かな庭も籬も
それとなくあれのみまさる草村の
露の宿りもかれ〴〵に物すごき夕
なりけり〳〵
女詞「けに心さへ[illegible]

猶々墓所へまいり弔まいらせう
ワキ「うれしや扨ハ定家乃望みてらく頓写[illegible]
まゐらう
女「あれなる石塔にて候
ワキ「ふしぎや是なる石塔をみれば星霜ふ
りたるに蔦葛はひまとひ形もみえ
ず候是はいかなる人のしるしにて候ぞ
女「是ハ式子内親王乃御墓にて候又此

かつらをハ定家葛と申候 ワキ「あら面白
や定家葛とハいかなる謂にて候ぞ
御物語候へ シテ「式子内親王ハ始めハ
賀茂の斎の宮に備り給ひしが程なく
下り居させ給ひしを定家の卿忍び忍び
御契り浅からず其後式子内親王程
なく空しくなり給ひしに定家の執

心葛となつて御墓に這ひまとひ互
の苦しみ離れやらず共に邪婬の妄
執を御経をよみて弔ひ給ひ候へかし
ふりまつはれきん 忘れぬものをい
にしへの心の奥の忍ぶ山忍びて通ふ
道芝の露の世がたりよしなしや
サシ「い[illegible]の緒よ絶えなハ絶えねながらへハ

もの思ふ身のよるぞある心乃秋の
花ぞちるまぼろし夢ありさて
又かれ〳〵の中と成 昔ハ誰と
思ハけらしなの心ぞそしあさき
色 あはれし霜より志もに朽果て
世々にふりにし山あひの袖の涙乃身
の昔のうき恋せしとみそきし賀

我の母院よしも錦りぢよ身あれ九
我や先人もあとよき人の夢の
色よかきろう出しきつもとそれ
とあるも世乃なかなれ中乃名ハ
東よりうれしきえハ大方乃宿を待う
ろうき白の光雲の通路絶果てし
昔姿とくめさぬ昔つゝき諸とよ

上女 いとしや歎くたゞみとも命もあん肩やお
ゑに君のつらきの心の中やな縁しきんに
まて思へばかゝる執心家高と成
悲しく此出師よいとゞ部もや
ふて葛のさ嫁入のなされまとうり荊の
髪もむすぼゝれ露もまよふぞる
妄執をたまけ給へや かりかす

せを関かゝみば身も程なく忌服とりあ
成しやは身も孤やらん や 女 誰とてもお
きぬれきてはあさちつゞおよ杉かし
かわりりおゝ飾りても程よしずあさ
地 月よしや草墓の苔かれ色もよへ出よ其
名をも 女 今かつてまし 地 此うへ我
まつ式子内親王も見しみし身れ表ま

よの姿ハいかきろれ石に残れ形だに
それとも見えず葛はひまとはれたまを
けにと云ふかきくさはきりもなく

ワキ上哥

夕もうろ月影に松風鳴きて
物すごき草の陰なる露も涙も思ひ
乃其の数々に弔縁ハなほ経やく

女

鐘うとよ関のさつれさの山月に

またとるつのほうの道昔ハ松風
花月に詠じかハし翠帳紅閨に枕を
地 ならへし様々成し情も 女 花も
紅葉も散りに 地 朝の雲 女 夕の雨と

上

ふることも今の身も夢も現も幻も
ともに無常の世となりて跡も
残らぬ中に乃草の陰ならぬ律の

宿ありとてやはつまあらき宮家うつら
見ゆるし給へや御僧
ワキ 甚痛りの法方
猶やあるらんいや仏平等説如一味
雨随衆生性所受不同
女 所隔へきよ
身はあだ浪の立居だよりなき跡虚しも
苦しきの堂家につまをとどろし
てかゝれるしを陰はさと風よ芳経や

上 唯今讀誦志給ふは薬草喩品なり
ワキカヽル 中々なれや此妙典よぞもらく草木の
あらされハ非情のうつゝも掛けれき
地 て仏道なるへきを給ふへし
女 あらありかたの経や
地 きゝとしも實に妙なる法の声
ワキ あまねき露のめくみとそうまく
女 みつもあく
ワキ 三門もあさい一味の法

法乃雨のしたゝりハ皆うるほひて草
木国土悉皆成仏のきをえぬれは定
家葛もかゝる涙もほろ〳〵ととけ
ひろこれハよろ〳〵と足弱車の火宅
を出たる有難さよ此報恩にいさ
さらハありし雲井の花乃袖を
今にかへすなる其舞姫のをミころも

上女 おもなの舞の 地 有様やな 上女 おもな
乃舞の有さまやな 地 おもなれやおもな
ものうかれやあな 女 本より此身ハ
上地 月の顔はせも 下女 曇りかちに 上地 かつら
乃まゆすみも 下女 おちふるゝ涙の
上地 露と消てもつたなや葛乃葉の葛
城の神すかたはつかしやよしなや夜の

契れ夢の中よりうつゝ前よりあるは
葛の葉のもとのごとくはひまとはるゝ
や定家かつらのはひまとはるゝや定家
かつらのはかなくも形は埋れて失
せにけり

次第

蝉丸

定めなき世の中〳〵に〳〵うきことや
頼み成らん　是ハ延喜第四の
御子蝉丸の宮にておはします　実
や何事も酬ありける浮世かな前
世のかいぎやういみじくて皇子
とハ成給へども襁褓のうちよりなど

やがて両眼盲ましくてはつでん
よ月日のみえなく闇よとぞしらず
暗みつてでかゝぬ雨もやむをなし
明しくらしき給ふよ帝の御跡
数多世や説びかよるをもしもなう
逢坂山に捨奉はゞくせと仰し
去れとの綸言出てくるはけなく痛う

けり限りあれども勅定なれば力
なく　其夜は車出しの路を雲井
のよそよめぐりて　落日の空
もえ給ふの勅路をくゞきにあめて
よいつゞくることもかなる気のぼよえお
きいうの行来だちあきた世草申は字木
れかめのとしもてまうきの関路

たどりゆく迷ひの雲も立わたる
逢坂山は越よまりく めぐりて
清貫 備前より 扨我もとは此
山よりもそて直べきけり さんは宣旨よて
御諚よりば是迄は御供申てこそはゞ流
くよ捨なきや へきやう覚ずおそて
も我君宗堂辭より洪かし國を

治め民もとあるれむちのあるよが横
の數惡は何とやたる伍るや説んこのく
まて思のさしよるぬるは作りう あろ
愚れ清貫ろひかやおだ本十葉首目
のみとはるて筆およせのらいきやう
拙き故ありげりまは父帝も山かせよ
捨けりまを遣ずる此情あきいよ八紙左達

此世よりそのさきの業障を果し給
乃世をたすけんとのはかりごとぞ
社稷の親の慈悲よ甚おそくま
しの勅定やある　宣旨承くれ
頭を濁らしをおろしなり作
是を行とひたる事なり　是ハ
御出家をとげてたきはなすまてわい

らを給ひん　さるやすくらんゆくひ
をきりおろだんに抱きて唐土をさ
いしの申ころもかやうの姿にて有
きれうや　此はみそれをハげし盗
人の恐れも有へきれハ衣を改らく
さのといふものをまうしをしん　思ハ
面よろたての鳩とようも直つくべん

のと云なり　まくハ雨露の御為なれハ
同し笠をまゐらする　是ハさなから
ひみつさとやせとも積貢つる笠とい
おもあるに　又此杖ハ此道まてのへき
よ持まゐらすへし　宮こ見もつゝかる
およふ年の坂をも越まゝとの遍照
かよふみし杖の　大宮もことの坂ゆく

つえ　家ハ所も道坂山の　開の戸
はしのしやの竹の　つえ柱とも
頼まつる　文帝よハ　捨られく
かくる字世よあつさいの紹もまうぬも
見みよやも民の皇子の成行果
なうれしき伝人伝馬のみするくとも
なりのは棺衣袖をまほりて村毎の

り捨かたき涙かくちりりと
てらり行を隔りよ有明のつきの影を
押へつゞきや海るちりよ映ぬるきハ皇子
宮は跡よ唯獨りばかりよそふ枕とてハ
琵琶をいだきて杖をつき臥まろ
びてそ泣給ふ 是ハ延喜
第三乃みこにてさかかみとハ我事也我

皇子とハ生るれとも何乃因果乃故
やらん心よりして狂乱して邊土遠
境の狂人となつて緑乃髪ハさか
さまよおひのほつてなつれともくたらす
いかにあれなる童部たちハ何をて咲ぞそ
何我かみのさかさまなるがおかしいとや
げにさかさまなる事ハおかしいよな

梅ハ我よりもさきがけて我を
わするゝ社うらみなれ面白しく是ハ
ハ皆人の目前の境界せずき花
の根ハ地よりつゝきんせいの
末よのほり月の影ハ天よりかゝつ
て萬水の底まで流ず是ホとハ皆
何きもく順と見る洋まりといゝん我

き宮子あれなずまんよくろう鬚ハ
みよりわひのほうくをいわうと
識く是清順洋の中ろなりに
もしろや柳れとえともも凡ハ揺るま
上虎 風吹もとかきをすてもあきん
地 水かわくりもとつるてれ孩ざとうれ
葬名や流ますや 花紫都ちと立

出でゝうきねになくか賀茂河
やすゑ白河をうちわたり粟田口に
もつきしかば今ハ誰をか松坂や関
のこなたと思ひしに跡になるや音羽
山の名残おしの都や松虫鈴虫
きりぎりすの鳴や夕陰の山科
の里人もとがむなよ狂女なれど心ハ
清滝川と知べし逢坂の関の清
水に影見えていまやひくらん望月
の駒のあゆみもちかづくか水も走井
のかげ見れば我ながらあさましや髪ハ
おどろをいただき黛もみだれくろみて
げに逆髪の影うつる水をかゞみと
ゆふ波のうつゝなの我姿や　第一第

二の絃ハさくさくとして秋の風松
を払って疎韻おつ第三第四の宮
宮には蝉丸の声も四の緒から
をりきれ村雨の芭蕉をとてよそ
ほひや那草ハどちらも角をきみぬ
へし宮も羽もやも聞しあきれい
かきやあま鳧成るやのちよう

いもだちて音きこゆるき琵琶にてある中に
ずも是程の賤の屋かもしくらさくへ
は有まさりよどのつまそおとや浣ん
ぞよあつしき風てかるやの雨
の足音もせでひそかに立よりけり
居たり聞ざや此わら屋のうちにも
よ音するハ琵琶ならん 訪られつらぶく

かの三位よりてましましけり　シテ詞逆つさい色
せとよくせハ弟の宮の声成けり
あふさかゞみ社まいりたれ蝉丸ハうち
にましますか　セイ何ときこゆるハ姉
宮かと藁屋の戸をあけ給ひ
シテ浅ましきはわか様　セイ手に手を
手をとりかはし　シテ弟の宮か　セイ姉宮かと

かくもよはりてゆふつけの鳥も狂となく
逢坂のせきあへぬハ涙だりひよ袖や
しほるらん　地ちきんだ世ハかつる塚よ
里かうゞしやしつりましてや一樹の
宿りとてハもたち花の香をとめて
ちれもつゝあら枝ともや　シテ遠くハ
ちやうはうちやうきんはうゝくれ

ぢりくはまさに應非天皇乃御子おぼ羅波
乃宮子守侍の児ことたゞひに即位
穢讒乃底にしづめ皆是連理乃情と
かや　去ながら家をさとの宮りた
思ひはしりよわらやうちぬ一曲あく
いかなるたいそ志らへの宮乃ちとよ
ひかれて家よりる人乃水の流れもさり

しかりとかれう　世は末世に及ふとて
も日月は地に落ずまたひとり社思ひし
我らいかに宮子を出てかく計
人よたゞまよひつゝて雲井の宮を
もとも来えひ来てとひき境乃桜人路
頭山林乃賊と成て鳥辺去桜人のあ
まことを頼せつゝなりかはるまでも

昨日迄ハ玉楼金殿の床をみがきて
むきあの褥ひきかへて今ハ引かへ
所のみとそ竹乃柱よ竹のかき
のきも扉もまばらなるわらやの床よ
よるの寝ざめておとそもよらむろ
鳥うはよへの錦のちきは成へし
たまくらとふおとそ袂まとつ

あふ猿乃声も袖をうるほす村雨の
音をたぐへて琵琶乃音をひき
ならす我撥もあはく涙の
雨なも音きあわらや乃軒のひま
くまく月ハもりあらしめよみゆるす
のかねハ月もうとく夜をたゝよ
ぬまゝやれ部都ど思ひやらるゝ

痛はしや是迄なりやいつ迄も名
残は更に盡まじ暇申て蝉丸
一樹乃陰の宿りとてぞうきたよ者
まして宮ぎさしと乃宮の御わき
どまるとも思ふや思ひ給へ宮らつう
や我おうらゞゆく慰むこともあらじ
留るもとまらとゆふ雲の立やまぬ

ひとり泣居たり　あふや関路の夕
うらびはうれ心ならずも乃　我らろ
かゝる乃あそびゆく　通路とめよあふ
さかの　関乃杉村すぎゆきも
人拝もとゞくあふまゝよ　わらや乃
竹よ　ぞゝひれて　たりひはちゝ
よつのはよは間をも送とどひかゝよ言れ

まさる祝ひの道ひろく国も豊にて静かなる
御代ぞつきまじく

猩々

ワキ

是ハ唐土かね金山の麓揚子の
里に高風と申民にて候扨も我
親に孝有者なるが或夜不思議の夢
を見る揚子の市に出て酒を売るならば
富貴の身となるべしと教へのまゝ
かなひわきの時去時来りぬるにや

次第〳〵に富貴の身となりて候又ふし
ぎなる事の候市毎に來りて酒を
のむ者の候が盃の數ハ重なれども面色
さらに變らず餘りに不審に候
ほどに名を尋ねて候へば海中に住猩々
とかや申候今日ハ潯陽の江に
出てかの猩々を待ばやと存候

上哥
潯陽の江のほとりにて菊をたゝへて
夜もすがら月の前にも友待や
又かたむくる盃の影をたゝへて待
居たり〳〵老せぬや〳〵藥の名を
も菊の水盃もうかみ出て友にあふ
ぞうれしき此友に逢ぞうれしき
みきと聞〳〵名もことわりや秋風の

シテ上「姫きをもてなし 上地「けど〻身にはさむからじ ことわりや白菊の ことわりや白菊の きせわたを温めて 酒をいざやくまうよ

シテ上「まらうどを御らんじらん

上地「月星は隠れなき

シテ上「所は潯陽の

上地「江のうちの酒もり

シテ中「猩々舞をまはうよ

上地「芦の葉の笛を吹き 浪の鼓どう〳〵とうち

シテ上「声すみ渡る浦風の

上地「秋のしらべや残るらん

舞

シテ下「有難や御身心すなほなるにより 壺に泉をたゝへ ただ今返しあたふるなり よもつきじ

ヤ「よもつきじ萬代までの竹の葉の 酒くめどもつきず のめどもかはら

ぬ秋の夜乃さはりにきがけもかずつく
入江によする白波のあしもとはよろ／＼と
色びよみかゝる枕の夢ばかりさむと
思へば仮の宿ぞそれまで盡きぬ宿主
めでたけれ

右之本者観世太夫織部
章句眞本令版行畢
正徳六丙申歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二条通御幸町西江入町
山本長兵衛